

南極OB会 会報

No. 4

発行	南極OB会 会長 川口貞男
編集	広報委員会

目 次

2008 Mid-Winter Greetings!!	1
ミッドウインター祭開く	2
ミッドウインター祭講演要旨	3~5
「極地探検の歴史とIPY・IGY」	小野延雄
「国際極年 2007-2008 と南極・北極をめぐる国際情勢」	山内 恭
南極関連情報	5~7
国土地理院「南極観測五十年史」発行、「しらせ」保存の希望	
団体、第50次隊の出発は12月末、南極に「ひょうたん島」	
2007年度・会計速報	7

村山雅美さんを偲ぶ (中)	8
連載 支部便り③ (北陸支部)	9
連載 「時は巡り」②	10
第2次観測—南極の厳しさを思い知る—	
連載 「昭和基地はいま」①	12
最近の昭和基地生活	
会員の広場	13~15
投稿記事 (ラングホブデ沿海に潜る)、会員の動向	
広報委員会からのお知らせ	15
資料 新たに命名する地名一覧	16

2008 Mid-Winter Greetings !!



南極OB会 会長 川口貞男様 ほか皆様

静寂な極夜に包まれた昭和基地で、私共越冬隊29名は全員元気にミッドウインター祭を迎えました。これまで国内の皆様方からいただきました温かいご支援に心より御礼申し上げます。日々の観測、設営作業と同じく、真冬の祭典ではひとりひとりが個性を発揮し、皆で協力して準備を進めてきました。

これを節目として、後半の越冬活動に向けたチーム力は一段と強まったと感じております。基地の維持、極夜明けに展開する沿岸および内陸旅行においても、引き続き安全に留意し、所期の目的を達成するよう努める所存です。今後ともご支援ご鞭撻をよろしく願いいたします。日本では暑さが厳しくなる時節、どうかお元気でお過ごしください。

第49次南極地域観測隊 越冬隊長 牛尾収輝 ほか隊員一同

2008年ミッドウインター祭開く



川口会長の挨拶

2008年度のミッドウインター祭が、南半球の冬至、北半球の夏至の日の6月21日（土）午後6時から、東京・千代田区九段北4丁目のアルカディア市ヶ谷（私学会館）で開催され、雨もよいの中約60人が参加した。

昭和基地の第49次牛尾収輝越冬隊長らから別項のようなメッセージが寄せられ、また川口貞男南極OB会長からも祝意が基地に送られ、基地と東京でともにミッドウインターを祝った。

ミッドウインター祭は、西尾文彦さんの司会で始まり、川口OB会長は次のように開会の挨拶をした。

「夜の会合になってしまい、申し訳ない。ミッドウインターは南極関係最大のお祭であり、各国基地も一斉にお祝いをしている。日本隊も第1次の越冬以来現在までこの祭りは続いている。昭和基地の第49次隊からも、会場入り口に掲示されているような祝意と決意のメッセージが送られてきている。昭和基地と一緒にお祝いをしたい」。

続いて第1部の講演会に入り、お二人の方が記念講演をした。

最初は小野延雄さんの「極地探検の歴史とIPY・IGY」。

二人目は山内恭さんの「国際極年2007—2008と南極・北極をめぐる国際情勢」

別項で講演内容を紹介しているので、ここでは省略する。

第2部の懇親会に入り、乾杯の音頭は村内必典さん。挨拶で「私は1, 2, 3次隊に参加し、第3次で越冬した。ミッドウインターのお祝いが強く印象に残っている。高等学校

も海軍もクラス会はなくなってしまったが、南極だけはこのようになくならない。おめでたいことだ」と述べ、乾杯した。



村内必典さんの乾杯音頭で懇親会開会

懇談が続く中、参加者が次々に挨拶した。この祭典の幹事を勤めた白壁弘保さんの友人俳優の竹脇無我さんが夫妻で参加、「政治家は赤坂に議員宿舎を建てるより“しらせ”を5隻くらい建造しろ」と挨拶した。「宗谷」の航海士だった高尾一三さんは、第1次航海の頃の思い出を中心に、88歳になって元気いっぱい「ふじ」艦長の松浦光利さんは、海上自衛隊が南極支援に参加することになった時の思い出などを紹介した。

ここで4月16日の二代目しらせの命名・進水式の模様をスクリーンで紹介、渡邊興亜さんが解説した。南極の氷が登場して、水割りのピチピチ音を楽しみ、小野延雄さんがこの氷に含まれた縄文時代(?)と思われる空気を取り出す実験を披露した。



小野さんの南極氷から空気を取り出す実験

この後再び挨拶となり、第49次の夏隊長伊村智さん、北海道支部の山田知充さん、茨城支部の多賀正昭さん、山陽支部の渡部和彦

さん、「しらせ」艦長倉田篤さん、第17次越冬隊長芳野赳夫さん、ドームふじの掘削担当で2度越冬の田中洋一さんらが登壇した。盛会裏に午後9時散会した。(深瀬 記)

ミッドウインター祭講演要旨

極地探検の歴史とIPY・IGY

小野 延雄

(国立極地研究所名誉教授 3次)

来年はピアリーとヘンソンの北極点到達から100年になる。アムンセンが南極点に立ったのは2年後であった。それ以前の北極・南極は思索と想像の世界であり、古代ギリシャの哲学者たちの考えに影響され続けた。紀元前4世紀にアリストテレスは北半球の陸地と釣り合う巨大な大陸が南半球にあるはずだと考え、アンタルクティコス(北の反対)と名付けた。その後テラ・アウストラリス・インコグニタ(未知の南方大陸)と呼ばれて、2千年近く世界地図に描かれてきた。2世紀前半のプトレマイオスの影響も大きい。緯度経度を入れた地図を描いたが、地球の大きさを4分の3位にしていた。この小地球はその後1400年も信じられ、コロンブスは日本を目指してアメリカに着き、クックは豊かな南方大陸を目指して南極大陸を見つけ損ねた。北極にも4つの陸地があると信じられ、メルカトールは北極中心地図(1589)にこれを描いた。北極・南極の探検航海は17世紀から盛んになり、島々の発見が続く。南極大陸は徐々に姿を見せるが、北極の大きな陸地には出会わない。

表題のテーマで、話は19世紀後半にとぶ。1872~74年にオーストリア・ハンガリー北極探検隊がフランツヨセフ島を発見し、帰路バレンツ海で船が氷に閉じ込められて越冬する。この隊を指揮したワイブレヒトは帰国後、陸地捜しよりも多点同時観測をしようと提唱する。それが国際極年(IPY, 1882~83)として実現した時、ワイブレヒトは既に故人であった。北極域に13の観測拠点が

設けられて国際協力観測が実施され、50年後に第2回国際極年を行なうことが決められた。



小野さんの講演

第2回国際極年(IPY-2, 1932~33)では、北極域に60を超す観測点が設けられた。ソ連はフランツヨセフ諸島のルドルフ島に世界最北の観測所を設けたり、8隻の船による観測を行なうなど、中心となって活躍した。そのうちの1隻、砕氷船シベリアコフ号(1300トン)はひと夏で北東航路を通過して、秋に日本にたどり着いた。

第2回国際極年は黒点極小期にあたっていたので、第2次世界大戦後の黒点極大期に国際地球物理学年(IGY/1957.7~58.12)を実施することになり、4本の緯度線観測・両極観測(特に南極)・衛星観測などが目玉として計画された。IGYマークには計画段階の人工衛星が描かれた。わが国では長谷川万吉、

永田武両教授が IGY を国際地球観測年と呼ぶことを決め、南極観測への参加を表明して国際的に尽力された。米国は 1958 年春に人工衛星（後にエクスペローラと命名）を打上げたが、ソ連が一足先（1957. 10. 4）にスプートニクを打上げていた。

IGY が間もなく終わる 1958 年暮、米国 IGY 委員会オーデショウ事務局長は IGY で得られた科学的成果を概括して公表した。エクスペローラによるバンアレン帯の発見を IGY 最大の成果に位置づけている。太陽活動が活発で、太陽黒点数はガリレオ以来の最高となった。地球の高層大気に影響を与えるような太陽面爆発は、1957 年 6 月末～58 年 1 1 月末の期間中に 38 回ほど起こり、うち 20 回が特別協同観測期間に指定された。各地で種々の同時観測が行われたが、詳しく

紹介されたのは 1958 年 2 月 10～11 日の太陽面爆発であった。その時、日本隊はバートンアイランド号の支援を受けながら西堀越冬隊を宗谷に收容し、犬を残して IGY 本観測越冬を断念する最後の決断を迫られていたが、磁気嵐で日本との連絡は跡絶えていた。その日、関東以北の各地でオーロラが見え、秋田上空のオーロラの写真が新聞紙面を飾った。

IGY 以来キーリングがマウナロアで大気中二酸化炭素濃度を測り続けたのが地球温暖化問題のきっかけとなった。また、IGY の時に原子力潜水艦ノーティラス号が北極海を潜航して頭上の海氷の厚さを測ったのが、北極海多年海氷の減少と消失予測の基礎データとなっている。

国際極年（IPY）2007-2008 と 南極・北極をめぐる国際情勢

山内 恭

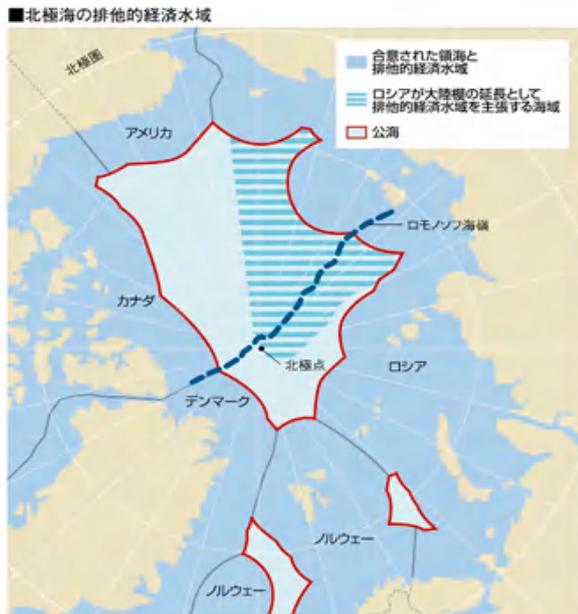
（国立極地研究所、総合研究大学院大学極域科学専攻；20，28，38 次）

南極観測が開始された国際地球観測年（IGY）から 50 年、今、まさに第 4 回目の国際極年にあたり、IPY 2007-2008 として推進されている。国際科学会議（ICSU）と世界気象機関（WMO）が合同で主催し（筆者は合同運営委員会委員をつとめている）、南北両極にわたり 228 件の計画がとりあげられた。その一つで、わが国からの長沼毅博士（広島大学）が代表をつとめているのが MERGE（極域における地球規模環境変動に対する微生物・生態系応答）計画であり、20 を越える国々から 100 名以上の参加を得て、北極・南極での研究が進められている。ORACLE-O3（IPY におけるオゾン層と紫外線）計画に関連しては、第 48 次観測隊でオゾンの集中観測を実施し、高分解能赤外分光計によりオゾン破壊関連物質の鉛直分布の観測や、9 つの南極各基地間で共同してオゾンゾンデ観測を実施した。TASTE-IDEA（南極横断トラバース観測—東南極分水界）計画では、第 49 次夏隊による日本スウェー

デン共同トラバース観測が実施され、昭和基地近傍の S16 を出発し、ドームふじ基地を通過した日本隊とワサ基地を出発し、コーネン基地（ヨーロッパ連合の 1 つの掘削地点）を経由したスウェーデン隊がドームふじ西方で出会い、一部の研究者はそれぞれの隊に合流してそのまま観測を続け、全行程を走破するという、壮大な観測が実施された。

今回の IPY にいくつかの特徴がある。一つはなぜ IGY の Geophysical、即ち「地球物理＝地球観測」ではなかったのか。これは、地球気候・環境変動にとって特に極域の重要性が認識され、地球物理だけではなく、生物過程の寄与が無視できないという、その二つの理由から「極」Polar が選ばれた。もう一つは、先の IGY を実施したグループがそのまま結集することなく、今回は 4 分し、IPY の他に、国際太陽系観測年（IHY）、国際惑星地球年（IYPE）、そして国際デジタル地球年（eGY）と、力が分散されてしまった。そして、極域科学研究が成熟した段階にあること。

これは、50年前の状況とははるかに異なり、予算当局に「いまさら」という印象を与えたとしてもやむを得なからう。



国連海洋法条約に基づき、大陸棚の自然延長として排他的経済水域延長申請（太田 2007）

さて、南極、北極を巡る国際情勢。

地球温暖化の現れの一つとして、北極域では激しい変化、シベリア域およびカナダ北西部・アラスカ域で地上気温の著しい上昇、そして夏の海氷域の急速な減少が起っている。ところが、それと呼応するかのように、北極点海底 4000m深にロシア国旗が立てられるという事件が2007年8月に起った。国連海洋法条約（UNCLOS）に基づき、大陸棚の自然延長として排他的経済水域（EEZ）の200マイルを越えて延長を申請できるという取り決め（2009年5月が締め切り）に基づき、各国がしのぎを削っている。海氷が減少することで、北極航路の通過が容易になるだけでなく、海底に眠る資源の探査の可

能性が出てきている。ロシアに対して、カナダ、デンマーク（グリーンランド）、ノルウェーなどがいらだち、国際的に緊張を呼んでいる。せつかく、冷戦体制の崩壊で、自由な科学研究に開かれかけたところ、まさに南極条約に対応する「北極条約」が求められる。こういう折に、わが国もきちんとした対応をとれるべく、国際北極評議会（Arctic Council；北極圏8カ国をメンバーとし、他9カ国もオブザーバとして参加）に参加すべきときと考える。



2007年8月、北極点水深4000mに潜水艇ミールよりロシア国旗を立てた（Nature 2008）

北極だけ心配していたら、南極も風雲急である。石油資源枯渇への対策としてか、イギリスは2007年10月、イギリス領フォークランド諸島周辺海域の大陸棚の領有を宣言した模様。上記の排他的経済水域拡大申請を出すとのこと。さらにオーストラリアやニュージーランドも、南極周辺の海底の領有権を主張する準備をしているらしい（Nature 2008）。本家の南極条約そのものが揺らぎかねない。我々研究者も、国際感覚を研ぎすましておかねばならない。

南極関連情報

国土地理院「南極観測五十年史」発行

国土地理院が編集した国土地理院「南極観測五十年史」が、平成19年11月1日に発

行された。同年7月に出された文部科学省の「南極観測五十年史」と同じA4版で、ペー

ジ数は694と、文科省の606ページよりも分厚い。

同院は1979年、1985年、2002

年に成果の収録を出しているが、「年史」はこれが初めて。南極観測の変遷、隊次毎の報告と資料、回顧録の三部構成になっている。

「しらせ」保存の希望団体

南極観測統合推進本部は6月13日、今年の夏で引退する観測船「しらせ」を、保存活用するため引き取りを希望している4つの団体名を発表した。

株式会社グローバルジャパン（広島県尾道市）

株式会社大柿産業（広島県江田島市）

NPO法人海洋研修センター（東京都文京区）

任意団体の内外環境ニュースセンター（大阪市）

1個人の名前は公表していない。当初7件の応募があったが、2件はその後辞退した。

同本部は今後、委員会を設置して詳細な検討をする。同時に売却価格の交渉も進め、年

内には保存活用か解体かの結論を出したいとしている。

金属のリサイクルや海運業などを営むグローバルジャパンは「地球環境や南極に関する講演や展示をして、子どもたちに伝えられるような利用をしたい」、土木建設の大柿産業は「地元・江田島の町おこしのために、環境科学館のようなものをつくりたい」と話している。（6月15日付け朝日新聞朝刊より）

第50次隊の出発は12月末

南極地域観測統合推進本部は7月10日に総会を開き、第50次南極観測隊（小達恒夫隊長兼夏隊長、門倉昭副隊長兼越冬隊長）の隊員43人（うち女性3人）を決めた。残る3人は秋までに決定される。

新造観測船「しらせ」の就航は来年になるため、50次隊の出発に間に合わず、オーストラリアの砕氷船を利用する。日本の観測船を使わない隊は半世紀にわたる観測史上初めてのこと。チャーター船の輸送力に限りがあるため、隊員の人数は少なく、出発は例年より1ヶ月ほど遅くし、12月末になる。50次夏隊と今越冬中の49次越冬隊の帰国は、いつもより1ヶ月ほど早い来年2月下旬になる。

決定した50次隊員右の通り。（朝日新聞による）

{越冬隊}

梅津正道、菅谷重平、土井ひかる、辰己弘、小森智秀、伊藤智志、武田康男、香川博之、村上祐資、高橋幸祐、森口和雄、五十嵐哲也、福田慎一、木塚孝廣、大平正、畑中浩二、篠原洋一、麦沢京介、井口まり、森川健太郎、加藤凡典、山口雄司、森澤文衛、井熊英治、樋口和生、佐久間健治

{夏隊}

大和田正明（セールロンダーネ山地調査担当副隊長）、石沢賢二（夏期設営担当副隊長）、尾形淳、田上節雄、谷村篤、志村俊昭、堤雅基、柚原雅樹、東田和弘、亀井淳志、飯田高大、橋本斉、木村直之、水野誠、飯田智子

◇ 夏隊に同行 茂原清二（元観測船ふじ・しらせ乗組員）



南極に「ひょうたん島」

南極観測統合推進本部は7月10日の総会で、南極・昭和基地周辺にある6つの小島に「ひょうたん島」など日本語の名前を付けることを決めた。南極の地形に日本語名が付くのは1994年以来。命名は観測活動や船の位置確

認などを便利にするための措置。日本語名は既に約310ある。

(新たに命名された地名と地図は最終ページ資料参照)



2007年度・会計速報 (続き) 会計担当：増田博

1. 前号での会計速報の続編～活動項目別収支状況等を報告する。なお、監事による監査は6月19日と6月27日に実施され、監査結果については総会で報告される予定である。
2. 2007年度(19年11月1日～20年3月31日)における活動項目別の実績等は下のとおりとなった。
3. 前号報告のとおり、やや特別な状況にあ

った会計年度であり、今回については、大幅な次年度への繰越の発生も当然であろう。

支出面では、総会費用補填など想定外事項もあったが、大胆な推計でたてた予算の範囲の中でほぼ活動できたと言えよう。

推計と実績の差については2008年度の予算(案)作成の際に十分参考にして行きたいと考えている。

4. 2008年度への繰越資金は、3,784千円となる予定である。

【項目別収支状況等】

(単位：千円・%)

項目		予算	実績 (対予算 比)	(対予算 比)	備 考
収 入	通信費	2,100	2,393	114	順調だが更に拡大努力中
	寄付金	60	0	0	対応実績なし
	グッズ料金	100	147	147	まずまず。更に拡大努力が必要
	その他		1		利息
	収入計	2,260	2,541	112	
師 出	会報関係	900	362	40	デザイン・2号関係のみ
	慶弔関係	41	0	0	対応実績なし
	運営関係	1,047	460	44	想定範囲で。若干の強化が必要
	交通実費	252	115	46	同上
	予備費	20	144	720	総会費用関係が重かった
	支出計	2,260	1,081	48	



村山雅美さんを偲ぶ (中)

大きく暖かな人

高野孝子

村山雅美さんに知り合った頃、私は20歳代後半だった。15年ほど前なのだろうか。私が女ばかりの国際隊で南極点までスキーで歩いていく計画が発端だったと思う。北極遠征や先住民たちとの旅などを続け、あれこれ勝手に動く私を、村山さんはいつもからかいつつ励まし、時にはズバリと核心を突く意見をくれた。村山さんの話はいつもおもしろかった。もちろん、雪上車による南極点遠征の話や、初期の越冬隊のことなど、歴史を当事者から直接聞くことの興奮もあったが、村山さんはいつも「現役」で、まさに動いている渦中の話をしてくれた。そしていつも、未来を語った。今の政府の方針の、社会の、課題は何か、そのためにどうしていかなくてはならないか。自分は次に何をしようと考えているか（そしてそれが大抵、突拍子もなく楽しいことだった）。大きな両手を広げながら早口で語った後、大抵は冗談を言って大笑いで締めくくる。

「やあ、高野さん、オーマイダーリンはどうしてる、マイダーリンは」

メガネの奥の丸い目をくるくるさせながら、こっちをのぞき込むようにして話しかける村山さんの表情と声が、今でも蘇る。これは私に会った時や、電話で開口一番、必ずといていいほどの挨拶だった。

一番最初にこれを言われた時は、何のことかわけがわからなかった。私の夫の氏は「大前」。それを *Oh my darling* というよく知られた歌詞とかけてのことだった。村山さんは、なぞなぞを引っかけても自分から進んで解を説明することがない。こちらが考えて解にたどり着けるかどうかを楽しんでいるようなところがあった。

村山さんのこの挨拶は最後まで変わらなかった。そのダーリンと一緒に、二人がお世話になった人たちに対して新聞を模したお手紙

を出し、英語の表記で「オーロラエクスプレス」と名付けた。数百通も一度に送ったろうか。すぐに電話があった。村山さんだった。「あのね、オーロラね、エルじゃなくてアールじゃないかね」と村山さん。「え？何のこと？」としばらく戸惑った揚げ句、送った新聞手紙の表紙を見ながらあわてて辞書を引いた。村山さんは正しかった。「Aurora」であるところ、「Aurora Express」となっていた（いや、私が書いていた）。その後も他にそれを指摘した人はなかったが、穴があったら入りたかった。

確実な、厳しい人でもあったが、私たちが行くと必ず両手を広げて受け入れてくれた。私たちが東京に暮らしている時には、たまたまご自宅が近かったこともあり、いつでも遊びに来なさいと誘ってくれた。行くと大抵、ウィスキーを一緒に飲んだ。近年は近くにおいしいラーメン屋があるんだと言って奥さんも一緒に出かけ、雨の中、三人でわいわい歩いてラーメン屋のあと、喫茶店に入った。

私が知ることができたのは村山さんのほんの一面にすぎないはずだが、本当にすごい人だった。さまざまな点から学ばせてもらった。村山さんと同じ時にこの世に存在し、そして身近に感じさせてもらったことを心から幸運だと思っている。

もっともっと長生きして、笑いを共にし、たくさんのことを教えていただきたかったのはもちろんだが、これまで本当にたくさん刺激を数多い人たちに与えてくださったことに感謝したい。今でもどこかおられるところで、多くの取り巻きを煙に巻き、冗談を飛ばしながら、楽しく改革を進めているに違いないと想像したりしている。

村山さん、大きく暖かな存在が私の励みでした。本当にありがとうございました。

(自然活動家、NPO 法人

ecoplus 代表理事)



連載 支部便り③ (北陸支部)

南極 OB 会の支部作りについて、富山・石川・福井三県で北陸支部を作るようにとの要請を受け、2006年6月1日に比較的集まりが期待できる場所として、富山市に6名程が集まり、金沢大学の岩坂泰信氏(24冬)を支部長とし、富山大学の川田邦夫(25冬・37冬)を幹事長として北陸支部が発足した。東京の本部から渡邊興亜氏に来て頂いて旗揚げをした次第である。本部から送られてきた名簿で消息の不明な方もあり、これまで南極関係者の集まりも開かれていなかったこともあって人数的には少ないが、第1次隊に参加された富山県芦峯寺5人衆の話題もあることから、佐伯富男氏関係者など、南極活動に強い関心のある方々も準会員になっていただく事も確認した。その後、金沢、福井方面も含めて名簿の確認を進めている。現在ご健在の会員は約30名程度と把握している。



2008年3月29日 南極 OB 会北陸支部総会後の懇親会(金沢駅前付近の居酒屋にて)

南極観測50周年記念の行事も進行中であったことから、富山市内の公民館行事に便乗し

て川田邦夫の南極観測に関する講演会を南極 OB 会北陸支部共催とさせてもらった。50周年記念行事として北陸支部が行った本番は2007年3月21日に富山県・立山カルデラ砂防博物館で行われた渡邊興亜氏の講演で、第1次日本南極地域観測隊の結成と芦峯寺から参加した5人衆の話である。県内でも名前が知られている越冬の故・佐伯富男氏の話は懐かしさを覚えたものである。講演に引き続き、この夏隊に参加して現在も元気に活動されている佐伯栄治、佐伯宗弘両氏を招いて渡邊氏が話を引き出す形で、当時の貴重な話を聞くことができた。また、越冬中の昭和基地隊長と直接電話交信が行われ、明瞭な音声が会場に聞こえ、興味ある内容となった。この講演会に続いて、同博物館にて3月21日から4月22日まで南極展が行われた。

2008年3月29日(土)に、南極 OB 会北陸支部総会を金沢市の中央公民館彦三館で開いた。第47次隊に参加して、帰ってこられた金沢大学工学部の尾崎光紀氏の話聞くのを機会に総会を持とうと企画した。15時から17時頃まで、支部長挨拶から始まり、新会員を含めて出席者の自己紹介があり、各自名前は聞いた事があるが、お会いするのは初めてという方々と面会できた。出席者は13名であった。今回出席はできなかったが、小松製作所関係の方々の消息も少しわかった。今回は南極 OB 会本部から渡邊興亜氏、また国立極地研究所の和田誠氏を招いて南極観測をめぐる状況報告を聞いた。国立極地研究所の移転に関する状況などが注目された。そして14時頃から47次越冬隊員・尾崎光紀氏の越冬生活の講演があった。最近の昭和基地の様子がよくわかり、経験者達には懐かしく、興味深い内容だった。最後に幹事から事務連絡があり、東京本部から持参された南極観測50周年の記念品の幾つかが示され、即日売り上げがあった。この会が終了した後、場所を駅前付近の居酒屋に移し、懇親会が開かれた。大変和やかな雰囲気、楽しい一時であった。

(北陸支部・幹事長 川田邦夫)



連載「時は巡り」②

第2次観測

—南極の自然の厳しさを思い知る—

第2次越冬隊（地理・犬橈担当）吉田栄夫

往航

1957年10月21日、前年の第1次出航の小雨そぼ降る晴海埠頭とは打って変わった快晴のもと、宗谷は東京の日の出棧橋から歓呼の中で出航した。前年帰途のビセットを教訓として前年より18日早く出発したと仄聞したのだが、これが裏目に出たともいえる事態に遭遇しようとは思ってもよらなかった。

ケープタウンまでは長い航海だが順調、12月2日ケープタウン入港。これからベルギー隊の輸送を行うというノルウェーの砕氷船ポーラーハブも入港。宗谷より小さく見えた。

12月11日出港、17日55°S通過、この日氷山初視認、悪天が続き19日には船が後戻りしているのではないかとこの冗談も出る中、20日64.2°S、53.6°Eあたりで流氷縁に達し、南極での調査開始となった。

ビセットの始まり

氷縁に沿うように西航した宗谷は、12月23日66°50'S、41.3°Eあたりで氷海に進入した。しかし、ハンモックアイスが多く、船は容易に進まなかった。この日、船の仮泊の間に初めて南極の海水の上に降りて、村内必典隊員の指導で氷のサンプリングの練習もした。

曇りの多いスッキリしない天候が続く中、12月31日天候が悪化、昼頃には航行を停止。日記には「風はE、良い前兆ではない」とある。翌1月1日には風速10mほどの吹雪模様となった中、後甲板で新年を祝った。夜には大虎、小虎が船内を徘徊、風で次第に舷側の氷がせり上がり、船が動かないことも影を落として、隊員達の気分も（多分船員達

も）鬱屈する中での大騒ぎ、公式記録では12月31日からビセットとなっている。

ビセットの中で

1958年1月2日、前夜の騒ぎを反省してか(?) 静かな1日、そして長いビセットが始まった。3日、太陽が顔を覗かせ、天測の結果西へ27哩漂流していることがわかった。私は海水観測のワッチの一人として、氷状の観察やレーダーで周辺の沢山の氷山までの距離と方位を測ったりした。また採水した海水の分析や、わずかな水開きからの採泥を手伝ったりした。しかし、キャロムや囲碁、キャッチボールに興ずることも多かった。

1月7日、翌8日に予定されていた接岸は不可能である旨、船側から正式に隊側に通告があった。こうした事態の中、隊幹部によるオペ会が種々の計画変更を議論していた。

1月11日にはすでに20名の越冬隊を11名に減らす案が検討されていた。13日、快晴の空を小型ヘリのベルが飛び氷状を偵察、撮影された写真には大小のぎっしり詰まった氷盤の中の一片と化した宗谷があって、我々の置かれた状況を示していた。

計画の変更、特に越冬人員の削減案をめぐっては、時に「俺の学問の方がより上等なんだ。越冬観測では価値はより高い」との議論があった。隊長の永田 武博士は、「誰でもそう思って学問をやっているんだ。上下をつけることはない。」と、真意のほどは別として話された。

宗谷が漂流してライセル・ラルセン半島の沖を超えようとする1月23日、突然氷野にクラックが走り、遠方にリードが見えた。翌日甲板で見渡す限りの氷野を見ていると、突然氷が動き出した。クラックが生じ、氷盤が

割れてぐるぐる回転しはじめる。こんな時海氷上に降りていたら、氷もろとも海中に没していただろうと、慄然たる思いで気象の矢田隊員と語り合った。越冬隊11名案で観測4対設営7、あるいは5対6などいろいろ議論が交わされる。12名なら地理、つまり私を入れようとの意見もあったらしい。26日には僅かな船尾の水開きからの採泥の手伝い。砂や礫に混じるクモヒトデや深海サンゴに、クック岬沖のグンネランス・バンクの浅い海底を想像してみた。

救援船バートンアイランド号来航

1月31日、東京から「外国砕氷船に救援を依頼する」との通報があり、複雑な気持ちを味わう。氷盤の爆破を繰り返し、船は比較的スムーズに進んでいるのだが。

翌2月1日、同室の小玉隊員の「万事休すだよ」との声で目を覚ます。左舷のスクリューが折れてしまったとのこと、早速写真を撮りながらショックを噛みしめる。越冬は？となったか。翌日米沿岸警備隊所属の砕氷船バートンアイランド号（以下バ号）が来航して越冬隊交代を支援するとの報があり、結果によっては16名越冬も可能かとのオペ会の空気も伝わった。船は海氷の爆破を行って航行、スクリューの一翼が欠損しても、必死で氷海脱出を試み、6日夕刻離脱に成功、直ちにフロートを装着された単発のビーバー機「昭和号」の試飛行にとりかかった。



舷を接して停泊する宗谷とバートンアイランド号（吉田撮影）

2月7日、バ号と氷縁付近で会合。ヘリが飛来し隊・船幹部との打合わせ、翌早朝から昭和基地を目指すことという。8日早朝からバ号は猛烈な砕氷航行、これに必死で追従す

る宗谷の舵利きの悪さに、同情を禁じ得ない。早くも接岸の期待が高まったが、この楽観はたちまち雲散霧消。バ号も厳しい氷に難航、リードを辿るがその向かう方角は昭和基地から遠ざかるものだ。18時バ号は停止、宗谷の左舷に横付けの形となった。バ号に乗り込んだ隊長が戻りオペ会、氷状が悪いので西堀越冬隊の収容を優先するという。雪上車を走らせる案が出て、この地点が定着氷なのかそれとも流水帯なのかで議論、私は流水帯案に加担した。

2月9日、バ号ヘリによる偵察で、定着氷縁までの13.5哩に及ぶハンモックした流水帯を割るのはバ号でも困難との判断が伝えられ、雪上車による67哩片道輸送で、8名ほどの越冬隊を残す案も実施することとなる。やがてバ号から雪上車輸送中止の助言があったが、村山越冬隊長ほかヘリで偵察し、できそうだと判断、試みることになった。そうした中で私は採水、採泥、分析のお手伝い。

翌10日、船倉からリード南岸の氷上に荷物を降ろし、橇に積み付けたり、北岸に作られた滑走路にビーバー機空輸用の食料を運んだり、人も船も右往左往して忙しい。やがて西堀越冬隊の立見隊員が帰船第1号として、ビーバー機から降り立ち、一方、村山越冬隊の丸山機械担当隊員が昭和基地へ飛んだ。翌11日青空がのぞき、隊長以下9名の西堀越冬隊全員と南極で生まれた仔犬6頭、猫のタケシが船に移った。私の犬橇担当としての仕事が始まる。

雪上車2両のチームは難航した。そしてビーバー機によってあくまで最小限の越冬隊を残すとの話を聞く。カラフト犬をどうするか、村山隊長は犬橇で数日間の短い旅行ができるよう残して欲しいと要望、私は率直に犬橇使用ができるか疑問である旨意見具申。しかしこの時、万一のときは処分してもよいということで、残すことになり、結果的に15頭が置かれたままになった。観測隊では“最小限の越冬隊”をめぐるカンカンガクガクの意見が闘わされた。私は日記にお歴々の言葉を留めた。

敗退そして再起へ

2月13日吹雪。バ号はビセットの危険ありとして、天候回復次第昭和基地にいる第2次隊越冬予定者3名を収容し、直ちに外洋に向かいたい旨通告。翌14日天候やや回復、

ビーバー機は昭和基地でぎりぎりまで燃料を減らし、3名と妊娠していた母犬シロ、仔犬2頭を宗谷に収容した。私はパイロットに深々と頭を下げた。

外洋へ向かってはバ号は難航、2月17日ようやく外洋へ離脱、以後宗谷は氷縁付近や暴風雪を避けての北方海域の航行を続けつつ、フロート装着のビーバー機のただ1回だけの

フライトで、7名の“墓守越冬隊”を送り込むべく機会を窺った。しかし天候、海状は我々に利あらず、2月24日その時を迎えた。12:00総員集合、永田隊長から声涙俱に下る越冬断念の談話、そして再起の決意が述べられ、涙する隊員もあった。私は15頭の犬達の運命を想った。



連載「昭和基地はいま」①

「最近の昭和基地生活」

伊村 智 (36、42、45、49次、国立極地研究所)

私の南極初体験は、第36次越冬隊である。その後、3回の観測隊経験を積み重ねてきてはいるが、私の南極歴はたかだか13年にすぎない。往年の南極観測を知る先輩方に比べれば、ほんの最近の10年あまりの変化を経験してきただけであるが、感じる所を書き記してみたい。

36次越冬隊の頃、外部との通信手段は電話、FAXであった。部門によっては試験的に電子メールを送れる状況ではあったが、基地内にはLANのネットワークも無かった。ニュースとして船舶向けのFAX新聞が送られてきていたが、文章を読み取ることすら難しいことが多く、あまり役に立たなかった。ちょうどこの年、夏期間中には阪神淡路大震災が、越冬に入ると地下鉄サリン事件が起こったが、具体的な状況は何一つ分からず、不安を感じたことを思い出す。高速道路が倒壊したとか、毒ガスで多くの死傷者が出ているとか、断片的な言葉からは何のリアリティも感じ取ることが出来なかった。各隊員は、家族の無事を電話で確認して安心し、そこで思考停止するほか無かった。停止していた状況認識が一挙に解き放たれたのは、翌年の37次隊が持ち込んでくれたニュース映像である。管理棟のサロンで食い入るようにビデオを見つめる36次隊員からは、言葉もなかった。まさに玉手箱のふたが開かれ、止まっていた時間が流れはじめた瞬間である。



最近の昭和基地

45次隊で我々が建設したインテルサットアンテナにより、インターネット常時接続環境が確立した。すでに一般家庭に電子メールが普及していたこともあり、家族との通信の主役は電話から電子メールに大転換した。いつでも、コストを気にすることなく、即時的に書き言葉を交換できるこのシステムの導入の影響は大きい。また、インターネットのホームページ閲覧も可能になり、映像を含めた情報が、何の不自由もなく手に入れられることになった。隊員達は、朝起きるとまずパソコンを立ち上げ、それぞれ最前線の新聞社のサイトをのぞいて朝刊を広げる。時代は変わったものである。

このような通信環境の劇的な変化は、観測隊員の意識に大きな変革をもたらした。居室

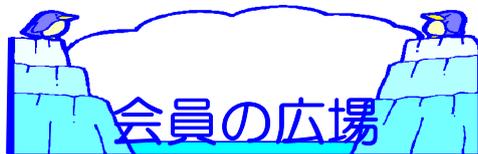
にいてもネットワークに繋がるようになり、プライベート空間に閉じこもったまま外部と接触できるようになったのである。そうなる、越冬生活は国内出張とあまり変わらない、南極出張程度感覚になってくるのかもしれない。国内の事情を全て引きずったまま、越冬生活に入れるのだ。もはや、日本と昭和基地との間に断絶はない。かつての昭和基地生活を、日本とはかけ離れた異空間として心から楽しんだ者にとっては、ちよっぴり味気なくなつたとも言える。

気分的に国内との断絶がない、という意識の意味は大きい。まずは、他の隊員と必要以上につきあわなくても、気持ちは国内と繋がっているのだからすむのであろう。隊員が居室にこもる時間が増え、同時にサロンやバーで共にくつろぐ時間が減った。何をするのも一緒という、ひと昔前の家族のように時間と空間を否応なしに共有していた時代は終わり、個人が気の向いたときに集うのが、現在の観測隊である。これは昭和基地の変貌と言うより、国内を含めた一般社会の変化がストレートに流れ込んでいると見る方が正しいであろう。

国内の延長気分で生活することが、南極においてどんなに危険なことかは火を見るよりも明らかである。一步間違えば命に関わるといふ南極の環境は、今も昔も全く変わっていない。そのため近年、特に安全意識の養成には時間をかけるようになってきている。安全に必要な知識・技術の養成の前に、ここは異界なのであるという意識を育てる必要があるのである。これもまた、ネットワークによる

隊員意識の変質の影響であると言えよう。

国内とのインターネット常時接続環境により、いまやかなりの隊員が国内のサーバーにブログを持っている。ブログとは、いわばネット上の公開日記である。電子メールで家族や友人と繋がるばかりでなく、ブログを介して不特定多数の他人とネット上のゆるやかな繋がりを保っているのである。その気になれば積極的に、昭和基地に居ながらにして、国内の不特定多数に働きかけることさえ出来る時代になってきている。ブログでは、主に日々の日常生活が綴られるため、それはある種、情報の漏出に当たる。何も無いときは別にかまわないのだが、いざ事が起こったとき、ブログを介して中途半端な情報が国内に不統一に流れるのは非常にまずい。最近の各隊は、出発前にブログに書くべきでない内容を指導するレクチャーを用意するようになってきている。報道協定との絡みから、隊員のブログ自体を禁止しようとする向きもあるようであるが、これはむしろ、ブログの普及をもって旧態然たる報道協定を見直すべきであろう。今や個人が個人の立場で、情報を全国に、または全世界に向けて発信出来る時代なのである。そこが昭和基地でも、これが出来てしまうのだ。むしろこれを生かして、南極観測隊の活動を宣伝する方策を考えるべきではないだろうか。インターネットにより、昭和基地の生活も、隊員の意識も大きく変わった。今はまだ、変わらぬ南極観測体制と、生活・意識の変革の間には大きな齟齬がある。生じた問題点をひとつひとつ埋めて、新しい時代の南極観測体制を早急に再構築して行かなくてはならない。



投稿記事

ラングホブデ沿海に潜る

大久保 嘉明 (9次越冬・医学)

1968年(昭和43年)2月1日、ヘリ

で昭和基地を発ち、ラングホブデ沖に待機していた「ふじ」へ飛んだ。日本南極地域観測隊初の潜水調査が目的だった。

ラングホブデのあたりは曇天で潜水に適した開水面が見つからず、結局この日の潜水は

あきらめて安息日となってしまった。

翌2日はからりと晴れて絶好の潜水日和。艦はラングホブデの最東端と2番目の突端間の小さな湾に面して仮泊しており、対岸にはルッカリーが見え、ペンギンの雛が20羽位日向ぼっこをしている。対岸との距離は100m位か(写真参照)。海面は2~5cm薄氷で覆われている。岸の近くが数m開いているだけだ。

11:30食事を済ませ、12:45に内火艇で岸に渡り、早速素潜り。気温プラ0.2℃、水温は深さ7mでマイナス0.7℃。覚悟しているせいか、海水に直接触れる顔面もそれほど冷たくは感じない。最初上唇が冷たかったが、だんだん感じなくなった。誂え時より肥り気味の体はスーツに締め付けられて動きがままならないのには閉口した。

素潜りしていた福井隊員が氷の真ん中にデーンと上がってきて首だけ出し、うろたえている。マスクもシュノーケルもずりおちているところを見ると、厚さ2~3cmの氷盤を貫通してきたらしい。

そのうちこちらも素潜り3回目位の時、息が切れて上がって来たのはいいが、頭が氷につかえ水面上に出られない。たかが数cmの氷だがゆっくり浮上しては破れない。何しろ出来るだけ我慢して息が続かなくなった所で上がってくるのだから、天井があって水面上に出られないとうろたえてしまう。やむなく今一度下降し、急上昇で勢いを付けて氷盤を突き破った。何のことはない、さっきの福井隊員と同じだ。



ラングホブデでの潜水の様

南極海の冷水対策として、厚さ6.5mm(フード付き上内衣とソックス付下内衣)と5mm(つなぎの外衣)をダブルで着用したネオプレン製ウェットスーツの偉力は素晴らし

く、顔以外は全く冷たさを感じなかった。

12分間の素潜り後しばらく休憩。1分間の心拍数は、福井隊員140、小生130とかなりな頻拍。両者チアノーゼ(酸素不足で唇が青紫色になること)なし。

20分間休んでスキューバ(通称アクアラング)潜水に移り、福井隊員がニコノスチール撮影と16mmムービー撮影、小生はサポート役。開水面が狭く、海流の様子が不明なので、内火艇から命綱を垂らして小生に結紮、更に福井隊員とは3mのロープで連結した。マリンスノーで視界悪く、3m位離れると福井隊員の黄色いボンベだけしか見えなくなった。海底は砂と岩で、ウニ、ヒトデ、褐色の藻類があり、ダボハゼみたいな魚も認められた。

そのうち小生のレギュレーターが凍って、空気が出っぱなしになるという故障が発生した。海水は少々の過冷却では凍らないが、呼吸中の水分は真水なので凍ってしまったらしい。シングルホースの予備と取り替えて潜水続行。

しかしもう一つ、比重1の淡水では8kgでよかったウェイトが12kgでも軽くて、深度10m以内では浮き上がってしまう。14kgにしてどうにか落ち着いた。

両者とも鼻血少々と軽い前頭部痛が見られたものの、幸い大きな事故はなく、素潜り、スキューバ総計50分間の潜水を終えた。

その後越冬中に2回の潜水を経験した。と言っても舞台は南極海ではなく、基地発電棟脇の10k1造水タンク。造水装置故障(3/20)と取水パイプ凍結(4/9)の修理だった。

最後になりましたが、本潜水調査を無事に終えられたのは、「ふじ」の総力を挙げたご支援と村山隊長はじめ8次の廣瀬・9次の小林両ドクターの見守りの賜です。また訓練でお世話になった真鶴ダイビングセンターの後藤道夫社長と鶴耀一郎インストラクターに衷心より感謝申し上げます。

参考文献

福井義夫、「ラングホブデに潜る」 極地7:32-37、(1968)

会員の動向

訃報

平成19年逝去者

鈴木康修 3月23日 宗谷3, 4 航空
増田 實 10月23日 10次越冬 地球物理

平成20年逝去者

鈴木晴雄	3月14日	宗谷3, 4, 5	航海
笹川義雄	3月27日	宗谷3, 4, 5	航空
吉田菊治	5月7日	17次越冬	気象
増田且登	5月10日	宗谷4	機関
蜂須賀弘久	8月1日	10次越冬	医学



* * * 広報委員会からのお知らせ * * *

南極OB会報第4号をお届けします。この4号からは、2008年度の会報です。

OB会の会報は、昨年10月15日付の第1号でスタートしました。年3回発行とし、年3,000円の「通信費」をお願いしました。その後今年1月に第2号、4月末に第3号を出し、2007年度の分の発行を終えました。この間、900余人の方が、「通信費」を振り込んで下さいました。有難うございました。

年3回というのは、5月、9月、翌年1月頃を予定しているのですが、スタート時期が変則的であったため、第3号が次年度に食い込んでしまい、今年度も若干不規則にならざるを得ません。したがって、5号は11月、6号は来年2月頃と予定しております。その後は正常化するつもりです。

今回の第4号には、新年度の「通信費」の振込用紙が同封されています。皆様方のご期待にこたえるよう、編集内容の充実にさらに努力するつもりでございます。引き続き「通信費」へのご協力をお願い申し上げます。

なお第5号からは、「通信費」を振り込まれた方に限って会報を発送することになりますので、あらかじめご案内いたしておきます。ご了承ください。

訂正とお詫び : 南極 OB 会報第3号に以下の誤りがありました。訂正してお詫びいたします。

3頁左欄下から7行目「富岡宏越冬隊長～」は「宮岡宏越冬隊長」に

7頁左欄上から2行目「川崎 巖」は「川崎 巖」に

7頁右欄写真説明の「吉田光男」は「吉田光雄」に

16頁会員の動向欄右欄上から4行目「古河辰男」は「古賀辰男」にそれぞれ訂正願います。お名前を間違えましてまことに失礼いたしました。

南極 OB 会事務局

郵便 101-0061 東京都千代田区西神田 2-3-2 牧ビル 301

TEL&FAX 03-5210-2252

E-mail : nankyoku-ob@mbp.nifty.com

<http://www.jare.org/>

資料

第132回
南極地域観測統合推進本部総会
H20.7.10

新たに命名する地名一覧

地図の番号	新命名地名	かな表記	ローマ字表記	地形区分	緯度・経度	位置・区域・形状・特徴等
1	泊島	とまりじま	Tomari Jima	島	南緯:68度59.1分 東経:39度37.6分	岩島の北北東約500mに位置する海拔12.2mの小島。第47次行動で「しらせ」がこの付近に漂泊したことに因んで命名。
2	北岩島	きたいわじま	Kita-iwa Jima	島	南緯:68度59.1分 東経:39度37.0分	岩島の北約300mに位置する海拔6.3mの小島。
3	ひょうたん島	ひょうたんじま	Hyotan Jima	島	南緯:69度13.3分 東経:39度24.6分	イットレホブデホルメンの南に近接する小島群のうち、南西端に位置する最も大きな島。島の両側に海拔25mと21mの二つの頂を持つ、ひょうたんに似た地形をなす。
4	米粒島	こめつぶじま	Kometsubu Jima	島	南緯:69度13.8分 東経:39度35.0分	小指岬の西南西1.2kmに位置する米粒に似た形状の小島。
5	斧島	おのじま	Ono Jima	島	南緯:69度14.5分 東経:39度40.6分	親指島の東にある群島の一つ。斧の刃に似た形状をなす海拔17.8mの小島。
6	斧柄島	おのえじま	Onoe Jima	島	南緯:69度14.8分 東経:39度40.4分	親指島の東にある群島の一つ。斧島を刃に見立てたとき、斧の柄に当たるとして命名された海拔22.0mの小島。

